

神戸市療育ネットワーク会議「第6回 就学前の発達の気になる子どもの支援体制検討会議」
議事要旨

(日 時) 令和3年12月16日(木) 15:00~17:00

(場 所) 三宮研修センター 705会議室

○…委員意見・質問 ●…所管部署等の説明 ※いずれも要約

1. 神戸市の発達の気になる子どもの相談支援体制について

＜事務局より資料1、及び、神戸市ホームページについて説明後、質疑応答＞

(1) 「子どもの発達の相談・発達障害の診療を行う実施医療機関に関するアンケート」について

●公開可能な情報は神戸市ホームページに掲載予定。かかりつけ医研修会などを通じても周知していきたい。

○発達の相談や診察が可能な医療機関の数は少ないので、ホームページで公表されると多数の要望に応じきれなかったり、通常診療時間帯に来院されたりするため、公表を控えたい場合もある。相談支援事業所や各区役所の窓口などで、家族に医療機関の情報提供ができれば、ホームページで公表ができていなくてもよい。

○発達の相談や診察が可能な医療機関に待機はあるのか。

●待機期間がある機関が多いと認識しているが、待機期間は変動するので、今回のアンケートには含んでいない。

●紹介状が必要な場合に、どこで紹介状を書いてもらえばよいのか分からないという問題に対して、一般的な相談での紹介状の記載を加えたことで、入り口で受け止めて次へつないでもらえる医療機関を追加することができた。

○一般的な発達の相談として、最初にご家族の不安を聞いて専門の医療機関に行くべきかどうかのスクリーニングしてもらえると、専門の医療機関の待機期間もかなり違ってくる。

○アンケート集計後に、地域格差についても教えていただきたい。

(2) 神戸市ホームページ「子どもの発達に関する相談」について

○スマートフォンでも見やすくなっている。例えば、「すこやか保育」について知りたい場合、リンク先に区役所の連絡先のみが掲載されているが、リンク先には簡単な制度説明があり、詳細を知りたい方は区役所の窓口へ案内できる方がよい。

○支援ハンドブックも同様で、スマートフォンは便利だが、押すと次々にリンク先が表示されて、たらい回しにされている感じがするので、簡単な説明を入れてもらいたい。

○広報に関しては、「ママフレ」や民間の子育て情報サイトの活用も検討していただきたい。

2. 就学時のつなぎ・情報連携について

＜事務局より資料2、資料3について説明後、質疑応答及び委員による意見交換＞

○就学相談は、いつから導入されるのか。

●来年(令和4年)4月からの導入を考えている。

○従来の就学相談は、4月から6月くらいに通学区域の学校へ相談に行く形で始まるが、来年の

4月より教育委員会の就学個別相談が開始されるのであれば、従来からの方法と組み合わせなければ、情報が行き渡らないのではないかと。

- 保護者には、就学相談の申込みの案内がどこから届くのか。
- 制度の変更に関して、ホームページ等で広報する。今後、各団体等には個別に説明予定である。
- 就学個別相談はどのような内容を想定しているのか。
- 前回の会議でもご説明したが、保護者の特別支援学校や特別支援学級に関する相談に対して、事前のエントリーシートを確認したうえで、教育委員会の職員が説明をさせていただく。個別相談は数か所の会場を検討予定している。
- 就学相談のエントリーシートは、スマートフォンやパソコンで入力できるが、ネットワークプランは紙媒体になっている。敷居を下げるという意味で、今後は他の方法や改善もお願いしたい。
- 就学してからも、ネットワークプランは引き継がれるのか。
- 教育委員会からのデータは学校へ共有されるので、学校でも活用し学年で持ち上がっていく。
- ネットワークプランについて、幼稚園や保育園と保護者の間のやり取りや、学校に届くプランに幼稚園・保育園からの情報がどの段階でどのように盛り込まれるのか教示いただきたい。
- 保護者は家庭での様子や必要な支援を記載すると思われる。保護者が幼稚園や保育園の先生と相談しながら、集団生活における社会面や必要な支援を書き加えていくことを想定している。医療的ケアや肢体不自由、知的障害等を含めて、全て同様の形式となる。
- 就学前の専門職と就学後の専門職のつながりが課題だったので、それをつなぐ意味でネットワークプランは大事であり、幼稚園の先生と学校の先生が直接引き継ぎ出来れば一番良いと思う。個人情報の問題もあるが、保護者を介する仕組みとなる理由は何なのか。
- 現在も幼稚園・保育園と学校との直接の情報交換の場はある。加えて、保護者とのすり合わせも必要なため、保護者を介した仕組みを整えていく。
- 最終的に学校に届いたネットワークプランの個人情報は、本人に返されるものなのか。
- ネットワークプランは、本人・保護者のものである。
- ネットワークプランを引き継ぐ最終学年はいつまでになるのか。
- ネットワークプランは、保護者・本人のものであるので、進学先に付いて行くイメージ。小学校から中学校へも引き継がれ、この情報をもとに更新される。
- 保護者が悩まれている場合など、4月に就学相談が申し込めなかった方へのフォロー体制はあるのか。
- 教育委員会で就学相談の機能を準備しており、フォローアップもできるように考えている。
- 就学時以降の中途障害や、学年が上がるにつれて支援の必要性が生じた場合はどうなるのか。
- 就学後の新規相談の仕組みについては、今後の検討課題である。
- 保護者にも支援が必要な方の場合には、保護者への情報提供やサポート体制も必要である。
- 外国籍で日本語を母語とされない方のサポート体制も必要である。

3. サポートブックについて

<事務局より資料4、資料5について説明後、質疑応答及び委員による意見交換>

- サポートブックに関しては、普及している地域と、そうでない地域がある。保護者から支援者への情報提供であり、何ができないかではなく、どのようにすれば出来るのかを記載する。改訂後のサポートブックは、就学時より使用するネットワークプランとも重なる部分が多いので、サポートブックを記載すれば、その内容をネットワークプランに取り入れられる。

- ネットワークプランと同様、サポートブックも保護者だけで記載するのは難しい。項目が多く詳細なので、記載のサポートが必要である。
- 現在、年に2回、サポートブックの保護者向け講座を開催しているが、支援者の方も一緒に参加する講座や、支援者向けの講座も今後検討したい。支援者が、保護者のサポートブック作成の支援ができる仕組みを考えていきたい。
- 現在サポートブックを作成している年代はどれくらいか。
- 現在は、就学前の概ね4歳から5歳児を対象にした講座と、就学後の概ね1年生から3年生を対象にした講座の、2種類の講座を開催している。また、講座とは別に、発達障害者支援センター職員が各療育センターに出向いて講座を開催している。出前講座には療育センターの職員も参加しているので、同様の形態でもう少し支援者の対象を広げて実施できないか検討している。支援者には、幼稚園や保育園の先生も含まれる。
- 若い世代の保護者の方は、紙に書くこと自体が面倒で、何でもスマートフォンを使う。支援の必要な子どもの子育て中の保護者に面倒なことをお願いするのは難しい。外国籍の方も書くことは大変である。
- スマートフォンでチェックを入れるなど、様式や媒体の工夫をされるのか。
- 現時点では、ワード形式での入力を想定しており、手書きでない段階までだが、媒体の工夫等は並行して検討していきたい。
- 教育委員会のネットワークプランとの共通項目は自動的に移行するなど、就学前の発達や支援の情報を一元的に整理できるようにお願いしたい。
- 保護者の負担軽減の観点から言うと、災害時の要援護者支援に関する情報も盛り込まれるとよい。
- サポートブックの使い方のポイントの説明が、保護者が支援者に依頼するニュアンスが強いように感じる。
- サポートブックが使われていない理由の1つに、非常に熱心な保護者の方が作成するサポートブックが、分厚くて見にくいことがある。ポイントだけが確認できる分かりやすい様式に統一すれば、保護者の負担も軽減される。また、ICTの技術も使い個人情報保護しながら情報をつなげば、別の様式に必要な内容だけ取り込める。
- ネットワークプランもサポートブックも、幼稚園や保育園の先生方のサポートが必要になってくる。運営側としては業務的な負担もあるので、補助や加算など制度面の支援があれば、認知も高まり、積極的な関りが可能となるのではないかと。
- サポートブックは希望される方が作成し、それを就学相談でうまく活用できればよいが、教育委員会の就学相談は対象が広がるので、最初のエントリーをするところで躊躇して、以前よりもやりにくくなったことが起こらないよう配慮していただきたい。また、様々な課題も抱えているので、改良を続けていただきたい。

4. その他

- 今後、外国籍の方の問題について取り上げてもらいたい。特に言葉の遅れについて、母語に習得が影響しているのか、本来持っている障害なのか、判断しにくい状況がある。保護者の障害の受容や、検査や支援に関する説明も難しい。障害と言語の問題を二重に持っている方へのサポートについても考えてもらいたい。